

作品の背景や情報 黒岩剛仁

「心の花」に入会して短歌を作り、読み続けて約四十年、常に考え（悩み）続けて来たことについて書く。それは、短歌作品を読むに当たり、その作品の背景や作者にまつわる情報をどれくらい援用するか、である。佐佐木幸綱は、「心の花」の東京歌会や全国大会、「短歌研究」の座談会「作品季評」において、よく「作品はテキストとして読むべきで、読む側が迎えて読むべきではない」と言い、「今のあなたの読みは、自らが知っている作者の情報に基づき過ぎではないか。作品自体にはそこまで詠まれている」と指摘することがある。その発言に接する度、いつもハッと我に返り自分の読みを点検するのだ。

・悩みごと溶けたみたいに降る雨がぬかるみにまた水を与える

武田 穂佳

・オフィーリアのような気分で横たわるソファアーベッドにコート着たまま

・絆創膏みたいに雪が降ればいい夜の間に降りますように

「短歌研究」三月号に作品連載三十首の第五回として掲載されていた「求心」より。私はこの作者をよく知らない。新人賞の授賞式で客席から見ただかも知れないが、覚えていない。しかしながら、今回の三十首をたまたま読み、その中の「酒入りのケーキひ

と切れそれだけで動けなくなる弱いわたくし×飼犬の首輪の穴を詰めたこと今日のわたしのいばれる仕事×疲れっぱなしの下半期 百均の幅の小さいセロハンテープ」などから一人の若い女性の姿を思い描いた上で、右に掲げた三首に、そんな人物が詠んだ歌として（世代差を越えて）共感した次第である。

武田作に対する私の享受の仕方は、前衛短歌時代のバイブルとも言える『現代短歌入門』に岡井隆が記した著名な次の一節に適用ものだろう。

（前略）短歌における〈私性〉というのは、作品の背後に一人の人の——そう、ただ一人だけの人の顔が見えるということです。そしてそれに尽きます。そういう一人の人物（それが即作者である場合もそうでない場合もあることは、前に注記しましたが）を予想することなくしては、この定型短詩は、表現として自立できないのです。

では、以下のような作品を読む場合はどうか。

・無観客の弓取式はどこかしらルネ・マグリットの絵をみるごと
し 小池 光

・歌という非力な器にこだわりて六十年越ゆ非力も力 三枝 昂之

・ふたり子にかけ電話のどちらにも家族の喧騒のありてさびしむ 永田 和宏

いずれも前衛短歌の後継者だった人たちの近作で、「短歌研究」五月号から引いた。小池、永田作では、やはり伴侶を亡くした男の一人住まいとの情報を援用したくなる。三枝作の「非力も力」という感慨も、三枝昂之本人が発してこそ、と思われるのだ。